2026 年度　第 2 回「産学連携委員会」報告書

日　　時	2026 年 8 月 25 日（火）16 時 00 分～17 時 30 分
場　　所	事務局会議室と Web 会議
出 席 者	（敬称略：順不同）会議室参加：勝山、草川、冨澤、岩本、佐野、新城、金澤美、河原、福島、滋野、齋藤、北園、飯野、田村、水野、森田、入山、布川、伊藤、飯塚綾、山崎海、飯塚佳、佐藤、和田、村上伸、増田、寺久保、東、下鳥、波立、田中、広森、三野、永井、安川、富樫　Web：山田、日比、三井、田村、染谷、中川、長田、堀岡、曽根、村上大、入村、村田、矢島、岡田、内村、畑、小池、鈴木義、金様江、森下、福永、冨米野、竹村、三木、佐藤恵、西巻　事務局（文責）：色川

議題

①直近事業計画と日程の確認、2026 年度委員会スケジュール、協会事業スケジュールの告知を事務局より行った。

②情報系専門学校・大学との情報交換会（6 月 24 日）

約 1 時間半の会議で、前半は学校側からの報告、後半は「就活採用の早期化」をテーマにしたテーブルディスカッションが行われた。テーマが大学生向けで専門学生には合わないのではないかという意見もあったが、活発な議論が交わされた。

・ある企業が学生の親向けにアピールするため、あえて資料を紙で渡しているという話が興味深かったと共有。

・この会がきっかけで学内合同説明会に繋がるなど、有意義であったと述べた。

・他テーブルでは、専門学校での留学生増加と、それに対応できない企業が説明会を敬遠している問題が話題になった。今後、専門学校と連携するには企業側の留学生対応が求められるとの見解を示した。

・学生にエージェントがつき企業選定まで代行するサービスが早期化の一因ではないかという議論があったことを振り返った。

・OfferBox を導入している学校で、企業が費用を負担することでコンクールの入賞者が斡旋される仕組みに衝撃を受けたと発言。学校が推奨していなくても、学生が自ら登録する実態があると補足した。

・内定を出してから入社までの関係を維持する「内定者フォロー」が各社共通の課題であると指摘。自身の学校では 80%が内定済みだが、企業が早期化に割けるリソースが課題だと語った。

③県就研主催情報交換会（7 月 3 日）

・テーマが固定されていなかったため、大学の就職状況や内定辞退問題など、就活に関する幅広い情報交換が行われた。7 月時点では学生の動きが遅く、研究に注力している学生と早く動く学生の二極化が見られるとの話があった。

・自身のテーブルにいた大学の関係者から、学科の就職担当に連絡すればゼミとの接点を作ってくれる仕組みがあるという有益な情報を得たと共有。この窓口を活用して、採用に繋がる接点作りを進めたいと述べた。産学連携の活動としても活用したいとの意向を示した。

④SE 講座特別授業会の開催報告

文教大学と神奈川工科大学で実施された SE 講座特別授業会について報告した。

1. 文教大学での特別授業回（7 月 23 日）

「学生と企業の、企業にいろんなことを聞いてみよう」をテーマに、学生 26 名と企業 8 社が参加。学生からの質問は活発だった。

・「AI が今後の業界に与える影響」という漠然とした質問に窮し、企業側も明確な回答が難しかった。
・学生は真面目な印象だったが、就活はこれからという様子だったと報告。「質問の探し方を教えてください」という学生もいたという。改善点として、全体セッション後に個別質問の時間を設けることを提案した。

2. 神奈川工科大学での特別授業回

学生 48 名と企業 14 社が参加。学生数は例年の 120～150 名より少なかったが、来年度は元に戻る見込み。今回は授業後に少人数のミニ企業説明会が試行的に開催された。

・夏のインターンシップに行くか迷っている学生が多く、「何をしに行けばいいか」「何か壊したらどうしよう」といった不安に関する質問が中心だったと報告。企業側は備えているので大丈夫だと安心させたエピソードを共有した。
・学生は積極的だったが、本格的な就活はこれからという印象で、夏のインターン参加予定者は半数程度だったと述べた。学生は 1～2 日の短いインターンを好む傾向があったという。

⑤キャリア支援グループから活動状況と報告を行った。（委員会資料参照）　今後も各校での学内合説や業界セミナーなど多くの学校・学生との接点作りを目指す。各メンバーにおいても、積極的な参加をお願いしたい。

⑥40 周年記念イベント「ゆめまつり」の開催報告

事前予想の 1,000 名を上回る延べ 1,500 名近くが来場し、大盛況に終わったことへの感謝を述べた。実行委員会を担した富澤副委員長 は、当日の運営に協力したメンバーに感謝を表明。産学連携委員会は焼きそばと唐揚げの模擬店を担当し、焼きそばは完売したと報告した。イベントは大きな問題なく無事終了し、参加者からは非常に雰囲気が良かったとの感想が寄せられた。社員間の交流を促す良い取り組みだったと評価した。

⑦県就研との情報交換会（9 月 4 日）の企画

直近に迫った大規模イベントの最終調整が行われた。イベントは 9 月 4 日(金)にホテルプラムで開催され、大学側 20 校 27 名、企業側 56 社 90 名、合計 117 名の参加が確定している。

役割分担: 第一部の司会は山田副委員長、第二部の司会は佐野副委員長に決定し、両名とも承諾した。

ディスカッションテーマ: 事前アンケートと理事会からの提案を踏まえ、最終候補として「AI の時代に企業と大学は何を変えるべきか」が提示された。

- 最終的に、規範的な「何を変えるべきか」ではなく、「AI によって今、企業と大学で何が変わりつつあるのか」を探る方向へテーマのニュアンスを調整する方針となった。
- ファシリテーター向けに、議論を広げるための「ワード集」等の補助資料を作成し、事前打ち合わせを行うことも決定した。

⑧第 3 回委員会・研修会（11 月 27 日）の計画

毎年恒例となっている 11 月の委員会研修について、形式とテーマが議論された。

開催形式の変更: 事前に実施したアンケートで「日帰りの近場での開催」を望む声が大多数だったことを受け、今年は宿泊研修を見送り、横浜駅または横浜市内で 2 時間半程度の勉強会を実施し、その後委員会と懇親会を行う形式とすることが決定した。

研修テーマと講師: テーマは毎年好評の「採用の勝者となるために」を継続する方針。講師は参加者からの希望が多かった青木副委員長に改めて依頼する方向で進めることが確認された。テーマの具体的な内容については、アンケートで「AI」というキーワードが多く挙がっていたことを踏まえ、青木副委員長と相談して決めていく。

スケジュール調整: 早く帰宅したい人も参加しやすいよう、懇親会の開始時間を早めて欲しいとの提案があった。これを受け、委員会の時間を短縮するなどして、懇親会を早い開始時間で検討する。

⑨その他　富澤副委員長 より、9 月 11 日に東部技術校で業界セミナーを開催する旨が告知され、興味がある方の誘致を行った。

次回 2026 年度第 3 回産学連携委員会は　11 月 27 日（金）の開催を確認し、委員会は終了となった。

以上